

私の保育

宇田 昭子

一、私の好きな時間

一日の保育が終わわり、子どもたちが帰った後の保育室にもどる。床を掃き、机の上をふき、遊具を整頓し、その日子どもたちと一緒にできなかった飼育物の世話（水を取り替えたり餌を与えたり）をし、と私はせつせと身体を動かす。そして、この時、身体を動かしながら、私は、胸にいろいろな思いをよぎらせている。失敗したなあという苦しい思いあり、こみあげるうれしさあり、心地よい疲労感あり、

消耗感あり、時に充実感あり、その日その日のいろいろな思いを、今、別れたばかりの子どもたちの顔、声をありありと思い浮かべながら、味わう。

「今日のYちゃんはおもしろかったな」「NちゃんはTちゃんと一緒にうれしそうだった。」「Mちゃん、やつとーができて、やつぱりうれしそうだったわ。」「今日、あの時Kちゃんを叱っちゃったけれど……」など、乱暴に投げ入れられたYちゃんの上ばきを直そうとし、ころがっているままごとの茶碗を拾い、あるいは、引き出しからはみ出しているYちゃんのはさみを中心に入れようとする手を時々、止



めながら、私はとりとめもなく心に浮かべる。そして、考え、反省し、もう一度味わい、自分に問いかける。また、現在、一緒にクラスを担任している先生と（私たちの幼稚園は複数担任制をとっている）思いつくままに話してみ。私は、この時間がとても好きである。

子どもたちとの一日は、振り返る間もなくあっというまに過ぎてしまう。であるから、子どもたちが帰ったあとのその時間は、その日を子どもたちと共に、自分を振り返ることもなくすごしてしまった私にとって、ふと足を止め、自分を振り返り、子どもたちの姿を思い返すことのできる大切な時間に思えるのである。そして同時に明日への心の準備をする大切な時間だと思うのである。床を掃いたり、ザリガニの水を取り替えたり、遊具の整頓をしたり、その日一日子どもたちがたっぷり遊んだ保育室の整頓をするために手を動かしながら、私は同時に、明日への準備もすることになる。私の心の中で起きていることも同じで、とりとめもなくその日を思い返しながら、同時に「明日はNちゃんどうするかしら」「明日はきつと……」など、明日の子どもを思いながら、反省を土台にした新たな心構えや、わくわくするような期待を、心にもったり、余計な疲れか

ら曇ってしまった自分の心の目を少しはみがいてみたりして、明日への準備をしているのだと思う。

今日一日のことを自分の心と身体で思い受けとめ、確かめ、少しは整理しながら、明日への準備を、やはり心と身体とする。私はこの時間が好きである。そして、忙しく流れがちな教師生活の中で、私の大切にしたい時間の一つである。

二、うれしいことー子どもたちとの出会い

子どもたちとの生活をしていて、うれしいと感ずることは数多い。しかし、私にとって中でも、最も「うれしい」と感ずるのは、ある子どもがいて、その子どもが初めて自分というものを示してくれた時、私に対して自分の心を開いてくれた時、あるいは、初めてその子どもと「あ、心がつながったな」と感じられた時である。言い換えれば、その子どもと「真に出会えた」と感じられた時である。それは、幼稚園で初めて子どもが自分から遊び出した時であったり、私に自分の気持ちを初めて話してくれた時であったり、思わぬ子どもが思わぬ時に私を驚かそうと何か隠し

持ってきて私の前で見せてくれた時であったり、何か共通の体験をして、目と目が合い思わず笑ってしまった時であったりする。

そういう「時」を境にして、私と子どもとのつきあいは違ったものになる。本当のその子どもとのつきあいは、その「時」から始まるように思う。

私はこの間、本棚の隅から突に久しぶりに初めて受け持った子どもたちの個人記録ノートを見つげ出した。そして懐かしい思いでバラバラとめくって見るうちに、さまざまの子どもたちとの出会いが、まるできのうのこのように思い出された。そのいくつかを、ここに書かせていただくように思う。

〈K男のこと〉

入園式の次の日、K男は登園した時から泣いている。他の子どもたちが積木やままごとで、そろそろ遊び始めても、入口につっ立ったまま全く動こうとしない。私はK男の心が動きそうな遊びに誘ってみる。しかし、K男は「いやだ」ときっぱり拒否する。まだ涙のかわかない顔で、精一杯の抵抗を示す。この日は最後まで同じ調子で過ごす。

次の日も次の日も、K男は「幼稚園なんか嫌いだ。」というようなかたくなな表情で、私の言葉かけ、はたらきかけのすべてを受けつけない。どうしたらK男は心を開いてくれるのだろうか、私は途方に暮れた。

そして、四日目のこと、例によってかたくなな表情でつっ立っているK男に、私は「無駄かな。」と思いつつも、他の子どもたちが遊んでいる積木に、「Kちゃんもやらない？」と誘ってみる。「いやだ。」という反応。やはり、はたらきかけ方がまずいんだな、と私はがっかりする。ところが、その直後、K男が目の前にあつた積木を足で蹴った。私は思わず、「あっ、Kちゃん怪物だ。」と言う。すると、あのかたくなだったK男の顔が、思わずほころびしまった。私はうれしくて、すかさず、もう一度「Kちゃん怪物だ。」と言う。すると、「かいじゅうじゃないよ。」と言いながらK男は私に組みついてきて、両手両足を使って、私をたたいたり蹴ったりする。顔は真赤になって、しかし、笑っている。私もすぐ、怪物になった。

その後は、「ほくビルを作るんだ。」などと私に報告すると、K男は積木で遊んだ。私はやっと、自分を出すようになってくれたかとうれしく思い、ほっと胸をなでおろし

た。少々乱暴だったが、こうしてK男は、自分の殻を打ち破り、自分を出すようになった。私自身も、どんなはたらきかけをしてもつながらなかったK男の心と、とっくみ合いを通して、隔っていた壁を打ち破ることができ、その時から、心を通わせることができるようになった気がするのである。次の日からK男は笑顔で登園するようになる。不思議なことに、クラスで最初に、心からふれ合うことができるように感じたのは、K男だったように思う。

〈N男のこと〉

入園式の次の日、とてもおとなしそうな子だなという印象を、私はN男に対してもつ。三日目、N男は、積木を並べて汽車のようなものを作る。そんな姿を見ると、私は、「君の作った汽車にのせて」と早速、かかわっていく。N男は、困惑と照れとが入り混じったような顔をして、その場から離れていってしまう。これは失敗だ。なぜ、もう少し待ってやれなかったのであらう。自分の性急さを悔やむ。N男は、まだ私などにかかわられては困るのである。やっと、幼稚園で積木を並べることによって、自分を少しずつ出してみて、ためしているところであるのに……。か

めが首をそっと出してみたら、コッソんと石にぶつかり、あわてて、出した首を引っ込めてしまうように、N男は自分を引っ込めてしまった。

その二日後、二、三人の子どもたちが、お店ごっこのようなことをしていると、積木で作られたそのお店の台の下に、N男はもぐりこんでいた。私は、あまり気にとめずに、「くださいな。」とそのお店に買いに行く。すると、驚いたことに、積木の下からN男が、「ここにもありますよ。」と私に声をかけた。私は、精一杯の（と私には思えた）N男のそのことばに、できるだけさげすみなく、「じゃ、二つください。」と、内心はうれしきで飛び上がりた程だったが、言う。N男は消え入りそうに照れながら、しかし、売ってくれた。その日は、たったそれだけのことである。私は、この前のことがあるので、「あせらない、あせらない」と自分に言い聞かせながら、それで満足した。

次の日も、N男は、友だちがお店を始めると、その積木の下にもぐりこむ。今度は、私の方から「これください」とかかわる。N男は、私に品物を渡すと、すぐ積木の下にもぐりこんでしまう。まだまともに私の顔を見ない。しばらくたつて、私は「Nちゃん、上でもお店できますよ。」と

誘いかけてみる。しかし、やはり、この日はもぐりこんだままであった。翌日は、友だちとふたりで、積木で何か作っている。「落とし穴」だそうである。でき上がると、大声で（初めての大声で）「せんせー」と呼ぶ。そして、「この中に手をつっこんでごらん。」と、私を驚ろかそうとする。その後は、何人かの友だちや、私と一緒に、追いかけてっこをして遊び、初めて思いっきり身体を動かした。私のはたらきかけが特にあったからN男が変わった、というわけではない。しかし、N男の中で、少しずつ変化は起きていた。追いかけてっこをしながら私は、「ああ、N君とは、もう大丈夫だな。」と感じた。

〈Mちゃん（二年目に受け持った子ども）〉

Mちゃんは、いわゆる自閉的な傾向のある子どもであった。「Mちゃん」と声をかけても視線すら合わせない。手をつないだり、だいたりしようとする、するりと身体をかわして逃げる。無理に手を引いたりすれば、泣いていやがり、ひっくり返って泣きわめく。登園すると、自分のへやに来ることもなく、帽子とカバンと園服をどこへでも投げ捨て、ひとりで園庭を走り回っているMちゃん。いった

い、どう近づき、どう心のつながりをつけていったらいいのだろう。できるだけMちゃんの行為を受け入れ、Mちゃんが好きなことをしている時にかかわりを求めてみたり、同じような格好をして一緒に走ってみたり、時には、私が最低限、Mちゃんにしてもらいたいと思うことを強制的にやらせようとしたり、いろいろなことを試みた。しかし、たいていは、むなしく終わり、途方に暮れることの多い日々が、二か月余り続いた。

ある日、Mちゃんは、園庭の水をはったたらいで水遊びをしている友だちの近くに行き、見ていた。Mちゃんは、水に興味があり、それまでも何度か、水のある所へ行って水遊びをしようとしたことがあった。しかし、気温があまりにも低かったので、かぜをひいてはいけなないと、私は、やめさせていた。Mちゃんは、なぜとめるのかと抗議するように泣いていやがった。が、しかたがなかった。しかし、その日は、むしろ暑いくらいの日であった。私は、すかさずMちゃんをへやに連れていき、水着に着替えさせた。Mちゃんは、さほど抵抗せず、水着になると、自分から急いでたらいの所へもどった。私もすぐにMちゃんのとを追う。Mちゃんは、やはり水で遊びたいのである。

私は、じょうろに水を入れ、Mちゃんの背中にかげ、手でピシャピシャとやりながら、「つめたい、つめたい」と言う。Mちゃんは、「キャッ、キャッ」と笑って逃げる。

私は追いかける。近くにいた他の子どもも、じょうろに水を入れて一緒にMちゃんを追いかける。私たちは、Mちゃんに追いつくとMちゃんの肩や背中にじょうろの水をかけた。Mちゃんは、その度に、「キャッ、キャッ」と笑い声をたて逃げる。逃げながら、こちらを見ている。私はうれしくて何度も水をかける。「一步、近づけた。」と、その時感じた。その日、Mちゃんは、そのあとで、何かの拍子に自分から私のひざの上のってきた。

Mちゃんとは、その日からすぐに、心がスムーズに通い合うようになったわけではない。「あ、つながつた」と思うと、また離れてしまったように感じるまだ不確かなふれあいではあった。しかし、その後のMちゃんは、私と目が合ってニコッと笑ったり、じっと見つめたり、私のひざや肩の上ののってきて甘えるようなことがあったりし、確かに以前とは違ってきた。Mちゃんと、ふれあうことができようになるようになったのは、あの日の水遊びの時以来だと、私は思えるのである。

子どもたちとの、忘れられないさまざまな出会いが、このほかにもある。一つ一つが新しく意味があって、その度に、私は教えられることばかりであった。

三、今、思うこと

私が幼稚園の教師となって子どもたちとの生活を始めて、三年半という歳月が過ぎようとしている。早いものだとつくづく思う。子どもたちひとりひとりを大切にできる保育者になりたい、子どもたちと共感できる保育者になりたい、そして、子どもたちと過ごすこれからの一日一日を大切にしたい、そんな思いを胸に、三年半前、保育者としての第一歩を踏み出した私であった。しかし、今、新たに「ひとりひとりを大切にする」とは、どういうことなのだろうと考えてみると、なんと難しいことなのだろうと思う。自分を振り返ってみても、初めはただ子どもたちに「やさしく」接したり、子どもたちの行為をむやみに受け入れ認めようとするのが、ひとりひとりを大切にすることだと思いついたような時期もある。しかし、どうやら、そんなに簡単なことではないようである。これから

も、それを模索していくことになるであろうが、今、思うことは、できるだけ子どもたちと共に動きながら、子どもたちの真の姿を見つめ、子どもたちと共に感ずることができると、柔軟な目と心と頭を持ち続けられるよう努めることが、ひとりひとりを大切にすることにつながるのではないかとということである。

一年目は、保育者一年生の私にとって、見ることに、すること、ぶつかること、すべてが、初めての経験であった。それ故、子どもと共に、(それこそ同じ次元で) 困ったり、迷ったり、驚いたり、うれしかったりした。失敗も多く、そのために必要以上に子どもたちを混乱させてしまったこともある。一日一日が新鮮で、子どもたちの一つ一つの行為、変化に、驚いたり、困ったり、うれしく思ったり、いろいろなことを感じていた。子どもたちを「指導」することに必死で、子どもたちを前にしながら、子どもたちが見えず、自分の思い通りに子どもたちが動かないことに途方に暮れ、消耗感だけを感じた日がある。子どもたちと思いつき汗を流して遊びきった日もある。しかし、そうした日々、子どもたちから教えられることは、数えきれないほどあった。

三年以上たった今、思えば教師としての私は、初めの年ほど、子どもと一緒に困ったり驚いたり迷ったりすることは、少なくなった。幼稚園生活の一年間の流れというものがわかるようになり、いい意味でも悪い意味でも、子どもの行為がある程度予測できるようになったからであろう。しかし、そんな今だからこそ、気をつけなければならない、と私はときどき思う。「慣れ」という垢で曇った目と心で子どもたちに接し、三年間で身につけた保育の「技術」だけで子どもたちを動かす、三年間の教師生活で「教師らしさ」が身につけばつくほど、ともすると強くなりすぎる。「指導」の臭みで子どもたちを引っばっていき、まるで忙しく回転する車のような日々の情性のうちに、子どもたちとの一日一日をただ流してしまうことのないよう……私には、これからは心して、ときどき立ち止まって、振り返り、自分の目と心と頭の曇りを取り除き、それからまた歩む、ということをしていかなければならないと感じている。

(東京・練馬区立北大泉幼稚園)